日英の言語比較による考察　～受動態を中心に～

5年●●
附属指導教員 ●●

研究の動機

（1）アカデミックガイダンスでの学び
（2）吉野弘さんの散文詩 'I was　born' での気づき

・・・やっぱり I　was born なんだね・・・
父は怪訝そうに僕の顔を覗き込んだ。僕は繰り返した。
・・・I was born さ。受身形だよ。正しく言うと人間は生まれさせられるんだ。
自分の意志ではないんだね・・・

受動態に焦点を当てて、日本語と英語の表現の違いを見つけ、それらについて話者の認知の視点から明らかにする事を目標とした。

先行研究

英語では＜使役主＞を明示しないまでも少なくともその存在を暗示するような表現が普通の言い方として確立しているのに対し、日本語では＜使役主＞の存在に関しては何も触れない型の表現が取られる傾向があるということがある。＜する＞的な表現が基調となる英語と、＜なる＞的な表現を好む日本語との差の表れの一つの場合である。
（池上1981:p.196）

研究内容

研究方法
IBC対訳ライブラリー（IBCパブリッシング）より3つの作品を読んで、気になった受動態の文をサンプルとして集める。
集めたサンプルを比較して、＜生・死＞＜感情・心理＞＜被害・迷惑＞というグループに分けて考察を試みた。

始めに～生と死にかかわる表現～

日本語：能動態　英語：受動態
（1）I was born in Nara in 2003.
私は2003年に奈良で生まれた。

be動詞＋born はbear(産む)の受身形である。一方、日本語の「生まれる」は自動詞である。そして「産む」の受身形は存在しないことに気がついた。

日本語：能動態　英語：受動態
（2）At least two hundred people have been killed in a major earthquake and tsunami in Japan.（VOA 2011）
日本で大地震と津波のために少なくとも200人が亡くなった。

日本語では単に死亡したという表記であるが、英語ではKillという動詞を使うことによって、被害の思いが込められている。

（3）Her son was killed in World War　Ⅱ.
彼女の息子は第二次世界大戦で戦死した。
日本語では戦死という表現で死を受け入れているように思えるが、英語ではKillという動詞を受け身にして「殺された」と表現する。そこには「被害・迷惑」の意識が含まれている。

感情・心理に関する表現

日本語：能動態　英語：受動態
（1）I was excited to see the movie.
私はその映画を見てわくわくした。
（2）I was surprised at the news.
私はその知らせに驚いた。

例）be pleased with / be disappointed at / be worried about / be worried about / be interested in / be satisfied with etc.

英語では感情や心理を表す場合、他動詞を用いて受動態で表現することが多い。それに対して日本語は能動態で表す。

「被害、迷惑」に関する表現

日本語：能動態　英語：受動態
（1）My brother was injured in a traffic accident.
私の弟は交通事故でけがをした。
例）be delayed / be hurt / be wounded

人や物に被害を与える意味の動詞（be caught in / be delayed / be drowned etc.）は原形が他動詞であるため、英語では受動的に表現されるが日本語では能動的に表現される。

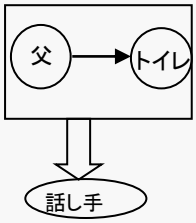
日本語:受動態　英語:能動態
（2）It started to rain on my way home.
帰宅途中に雨に降られた。

英語では受動態を作るのは他動詞に限られるが、日本語では自動詞も他動詞も受動態を作ることができる。日本語では、主体が事態を好ましくないと判断したという情意が文章に込められているが、英語ではあくまでも事態を客観的に述べている。

間接受身文

対応する能動文の無い受身文のことを「間接受身文」と呼ぶ。日本語ではこの間接受身文が使われるが、このような受身文は世界中の言語の中でもほとんど存在せず、日本語特有のものである。（高見2011：第二章）

（1）お父さんがトイレに入った。　（2）お父さんにトイレに入られた。
（間接受身文）



←話し手が関わっていない事象

＜間接受身文の例＞
（3）ここに洗濯物を干されると困る。
（4）目覚まし時計を止められて寝過ごした。
（5）妻に実家に帰られた。

考察

行為者に視点を意識的に移させない場合、もしくは行為者が不明の場合に受動態を使用するのは、態を変えることによって視点を変えるためだと考えられる。そして、日本語と英語で、必ずしも対応する言語表現が存在するわけではないことが分かった。それは、捉え方つまり認知の仕方に違いがあるからだと考えられる。

(1)英語が受動態を好む場合の理由
受動態を使用することによって、外部の物からの影響によって主語が変化したということを表すことができる。また、主語に影響を与えた原因を暗示させたいからであろう。この考え方が吉野弘さんの詩、 I was born　でも扱われていたわけである。
(2)英語では受動態であるが日本語では能動態で表す場合の理由
英語と日本語を比較すると、英語における受動態の方が、主語が被害・迷惑を被むっていることをより明確に表現している。
(3)言語と文化、言語と思考について
使用言語が違えば、同じ対象と面していても同じようには捉えないという可能性が生じる。言語が違えばものの見方も違ってくるという事である。

参考文献

池上 嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店 / 池上　義彦（1992）『ことばの詩学』岩波書店 / 高見　健一（2011）『受身と使役』開拓社 / IBC対訳ライブラリーより以下の三作品『赤毛のアン』『オー・ヘンリー傑作短篇集』『シャーロック・ホームズ』

謝辞

本研究を進めるにあたり、奈良女子大学文学部の●●先生、●●先生に多くのご助言を頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。